

## 企画展「化学と宮沢賢治」の実施について

小野 昌弘\*

### 概要

2016年は、詩人・作家として有名な宮沢賢治の生誕120年であった。これを記念して、当館では、「化学と宮沢賢治」という企画展を実施した。宮沢賢治は、盛岡高等農林学校で化学を学び、その後も文筆活動と共に理科等を教える高校教師や肥料設計、石灰肥料の営業等、化学との関係性が深かった。

今回の企画展では、その宮沢賢治と化学の関わりを実物資料の展示を通して紹介した。本稿では、その内容について報告する。

### 1. はじめに

2016年は、宮沢賢治の生誕120年に当たり、関連行事が賢治の生誕地岩手県花巻市を中心に全国各地で120件以上も開催された。内容は、主に宮沢賢治の作品類の紹介や研究・資料の紹介、各種企画展、賢治作品の演劇等での上演など様々なものがあった。

宮沢賢治は基本的には、詩人・童話作家として認知されているので、主に文学・芸術系の行事が中心となっていた。

また、宮沢賢治は、本人が「一個のサイエンチストとしては認めていただきたいと思います。」と書き記しているように、科学者としての意識も強く持っていた。これは、彼が当時の農民を救うため、農業の生産を上げるための方法を模索していたことから分かる。

賢治は、鉱物、地質、天文、植物など科学一般に通じていたが、化学についても深く学び、それを農業生産において利用し、実際に用いていた。

そして、賢治と化学の関わりは、農業に関することだけでなく、代表作「銀河鉄道の夜」をはじめとする彼の作品群の中に散りばめられている所に見て取れる。

今回の企画展「化学と宮沢賢治」では、この宮沢賢治が実際の農業や作品群に用いた「化学」の内容を取り上げ、それがどのような物であるのかを紹介する内容とした。

宮沢賢治に関して、これまでも各地で様々な展示会は開催されてきたが、本企画展のように化学に着目し

た内容で展示会が催されるのは、全国初のことで、宮沢賢治ファンのみならず、化学に興味を持つ人々にも興味を喚起できる内容とすることができた。

本稿では、その内容について報告する。

### 2. 企画展概要

本企画展の概要について以下に記す。

・企画展名 化学と宮沢賢治

・開催期間 2016年10月15日～

2017年1月15日

・見学者数 83,501人(期間中展示場入場者数)

・開催場所 展示場4階すばる望遠鏡紹介エリア

・展示品 94種類 147点以上



写真1. 企画展会場

宮沢賢治が記した化学用語から、元素、実験道具などの実物資料と、賢治原稿の草稿複写等を展示した。

\*大阪市立科学館 学芸員  
ono@sci-museum.jp

### 3. 展示について

以下に今回の企画展で展示した展示品について紹介する。大きく分けて12のエリアに分けられる。

#### 3-0. オープニング

企画展の開始また、導入を印象付けるため、天井からスクリーンを吊るし、そこへプロジェクターから映像を写した。

内容は、宮沢賢治と展示資料の一部を紹介するもので、パワーポイントで作成し、その映像をループさせることで以下の順番で流し続けた。

①賢治立像写真 ⇒②化学本論 ⇒③銀樹 ⇒④賢治自筆ケミカルガーデン ⇒⑤賢治座像写真 ⇒⑥春と修羅 ⇒⑦教師時代の賢治写真 ⇒⑧カリウム炎色反応 ⇒⑨雨ニモマケズ手帳 ⇒⑩賢治自筆みみずく



写真2. オープニング映像

写真上部のスクリーンに上記①～⑩の写真と前後の挨拶などを記した映像を終日流した。音声はない。

#### 3-1. 「宮沢賢治」

既に有名な宮沢賢治であるが、その導入として特に有名な文章、「雨ニモマケズ」を記した手帳の展示を行った。また、賢治が亡くなるときの遺言で作られた「国訳妙法蓮華経」も期間限定であったが、実物を展示した。

展示した「雨ニモマケズ」手帳は、宮沢賢治が持っていたその手帳を1983年に全ページ復元製作したものである。復元部数も、それほど多くなく、貴重なものである。

また手帳は幅80×高さ130mmと小さなものであるため、実物の手帳の拡大写真もA3版のパネルにして展示を行った。

国訳妙法蓮華経は、宮沢賢治の遺言で1000部作られた法華経の經典である。その実物を岩手県一関

市ある「石と賢治のミュージアム」から10月15日～31日の2週間期間限定で借用展示した。



写真3. 展示「宮沢賢治」

手前の展示ケース内、左手のものが「国訳妙法蓮華経」の実物。奥の展示ケースが雨ニモマケズ手帳(復元版)を展示した。

また、この展示の隣のボードには、宮沢賢治の生涯1896年から1933年までを紹介する年表を設置した。

年表には、その年の賢治の状況と書かれた主な作品名、国内外の社会情勢、化学史と科学史を掲載した。



写真4. 年表

宮沢賢治の生涯と、主要な作品の発表年、社会、化学などの歴史を記載した。

#### 3-2. 「盛岡高等農林と化学本論」

宮沢賢治が本格的に化学を学んだのは、盛岡高等農林学校へ入学してからである。賢治は、この時化学本論の第1版を使用したと考えられるが、当館では第7版を所蔵しており、そちらを展示に供した。

また、その化学本論を執筆した、片山正夫の紹介、そして、宮沢賢治の得業(卒業)論文の写しの一部を展示した。



写真5. 盛岡高等農林と化学本論

賢治の書いた得業論文写し、化学本論、そして、その執筆者片山正夫の紹介を行った展示。

### 3-3. 「父への手紙」

宮沢賢治は、職業のこと、宗教のことで父親との確執があったが、その父に対して数多くの手紙を書き送っている。そしてその手紙の一部には、高等農林で学んだことや、当時の先端の技術などを用いて、生計を立てたい旨のことを書き記している手紙がある。

その内容は、岩手県内などで採掘ができそうな、バナジウム、ウラン、タングステンなどの元素類の販売や、琥珀、バラ輝石、貴蛇紋岩などの鉱物類を宝石として売り出そうと考えを練っていたことである。実際にそのような商売はしなかったが、人工宝石の作り方なども知っており、技術的なことはある程度めどを立てていたのかもしれない。

その賢治の手紙の中に出てくる、希少金属類、宝石などにしようした鉱物類の展示を行った。



写真6. 父への手紙

賢治が父宛てに記した手紙に記載されていた、元素類、鉱物類を紹介した。元素類はおもに鉱物系で紹介し、可能なものは、単体も展示した。

### 3-4. 「春と修羅」「注文の多い料理店」

宮沢賢治は、生涯で2冊本を発行している。それが詩集の「春と修羅」と童話集の「注文の多い料理店」である。「春と修羅」は、宮沢賢治本人としては、詩集と呼ぶものではなく、彼の心に浮かんだ諸々を書き記した「心象スケッチ」であるということになっている。

いずれも1924(大正13)年に発行されているが、今回の企画展では、その初版本の実物を岩手県立図書館より借用し、展示に供することができた。



写真7. 「春と修羅」(右)「注文の多い料理店」(左)

いずれも1924年に発行された初版本。発行部数はそれぞれ1000部で、当時ほとんど売れなかった。これら本の現存部数は少ない。

### 3-5. 「農学校教員時代」

宮沢賢治は、25歳～29歳までの約4年間、稗貫農学校～花巻農学校で教師として勤務していた時代に上記「春と修羅」「注文の多い料理店」を発行している。



写真8. 農学校教員時代

賢治が、農学校教師時代に発行した「春と修羅」と「注文の多い料理店」を中心に、その中に記された元素類の資料を展示した。

その春と修羅の中で、賢治の妹トシが亡くなった時の「永訣の朝」という詩がある。この詩の中にも「蒼鉛」「二相系」など化学に関する用語が出ており、ここでは実際の蒼鉛と春と修羅の復刻本から、蒼鉛の出ている永訣の朝の詩の箇所と共に展示した。

他にも金・銀・銅など賢治の記した元素類を中心に資料を展示した。

### 3-6. 「羅須地人協会時代」

宮沢賢治は、花巻農学校の教師を退職し、私塾である「羅須地人協会」という活動を始める。これは、農民に農業生産の向上を目指した講義と、生活の質を向上させるための芸術との関りなどを目指した活動である。その活動期間中にも作品を作っている。ここでは、その時代の作品の中から実験器具類、また農民への講義に使用したパネル類の複写を展示した。



写真9. 羅須地人上階時代

賢治が講義用に作成したパネル類を写真左手のボードに、右手には当時記した詩などに出てくる実験器具類を展示した。

### 3-7. 「東北砕石工場」

宮沢賢治は、羅須地人協会の活動を病気などのために途中でやめざるを得なかったが、体力が少し改善してきた時に、肥料用石灰を販売する東北砕石工場という会社の営業兼技師になり、石灰石等の販売に奔走した。この展示ではその時に販売していた石灰石原石と、石灰粉末、そしてその元であるカルシウムを展示した。また、賢治は石灰石肥料を販売するための広告制作にも携わり、その時制作された広告の複写も展示した。

### 3-8. 「物語童話に出てくる化学/賢治が書き記した元素」

宮沢賢治が作品群の中に書き記した化学用語は、約600語になる。詳細は、本研究誌p.23に譲るが、そ

のなかで、主に童話に出てくる用語を幾つか拾い出し、資料を展示した。また、「銀河鉄道の夜」「風の又三郎」などの賢治の草稿原稿複写の中で、これら化学に関する用語が出てくる部分も展示した。



写真10. 物語童話に出てくる化学/  
賢治が書き記した元素

手前の展示ケースには、元素、鉱物類を中心に、奥のケースでは、実験器具や、ネオンなどの放電管の発光などを展示した。

### 3-9. その他の展示

上記展示以外の展示資料としては、宮沢賢治の写真類、また賢治が書いた図「ケミカルガーデン」「赤玉」「みみずく」、そしてイギリス海岸の写真類を展示した。



写真11. 日本以外で出版されている賢治本  
日本国内にとどまらず、英語圏、中国語圏、ヨーロッパ各国でも出版されている本を展示した。

会期中の12月中旬から、北海道立文学館の協力を得て、宮沢賢治の作品で英語、中国語、韓国語、イタリア語、スペイン語に翻訳されその国で出版されている本を展示した。さらに、ちくま文庫の宮沢

賢治全集や、英語で書かれている銀河鉄道の夜など図書・雑誌類を展示して、本企画展で興味を持たれた方が、すぐ宮沢賢治の作品に触れられるようにした。



写真12. 宮沢賢治の関連図書

宮沢賢治の作品が読める文庫本や、宮沢賢治の解説本など、20冊ほど図書を用意し、展示見学者が閲覧できるようにした。手前は当館発行ミニブック「化学と宮沢賢治」(後述)。

さらに実験映像を用意し、宮沢賢治の作品の中に登場する化学用語、化学の現象を見ていただけのようにした。

用意した映像は、「銀の微塵」と「炎色反応」「チンダル現象」「過冷却水」である。

「銀の微塵」は、作品「小岩井農場」などで登場する。

この現象を紹介するために、硝酸銀水溶液と銅線の反応で銀の結晶を析出させ、その出てきた銀を液中に散らばらせてその様子撮影した。これで銀の細かい結晶がキラキラと輝く姿を見ていただいた。

「炎色反応」は、詩、短歌、銀河鉄道の夜などの場面にでてくる。その中でリチウムの炎色反応について、映像を撮影し、紹介した。

「チンダル現象」は、空気中のチリなどで太陽光線の光跡がわかる現象で、私たちもよく目にするが、ここでは、レーザー光線を用いて、その光跡を見てもらえるようにした。

「過冷却水」については、作品「インドラの網」で過冷却の水、氷相当官などとして出てくる。

0℃よりも低い温度で凍っていない水が、何らかの刺激を受けることで、一瞬で氷になる現象を撮影し、映像で紹介した。

#### 4. 展示以外の関連事業

今回の企画展では、展示以外にも、以下の関連事業等を実施した。

1. サイエンスガイドによるプチサイエンスショー
2. 宮沢賢治に関する講演会 2 件
3. ギャラリートーク
4. 大人向け化学実験教室
5. ミニブックの制作
6. 資料目録兼ブックカバーの制作
7. 全天周映像「銀河鉄道の夜」の上映
8. 販売品関係

上記について、以下に紹介する。

##### 4-1. サイエンスガイドによるプチサイエンスショー

今回の企画展に合わせ、当館展示場で展示解説をしていただいているボランティア、サイエンスガイドに宮沢賢治とその中に出てくる化学についてミニ実験を用意し、展示見学者へプチサイエンスショー(ミニ演示実験)をしていただいた。実演していただいた内容は以下の通り。

###### 4-1-①. 銀樹

宮沢賢治の作品によく登場する銀または、銀の微塵という言葉を紹介するために行った実験。実験としては、銀と銅のイオン化傾向で、銀が析出する様子を顕微鏡下で観察してもらった。

銀は、メダルや装飾品として私たちは目にするが、ここでは、銀の微塵=結晶を紹介した。3-9で紹介した映像では、銀の粒が舞い散る様子を紹介したが、この実験では、銀の結晶が成長する様子、またその結果として銀の細かい非常にきれいな結晶ができる様子を見学者に見ていただいた。

###### 4-1-②. チンダル現象

こちらも、3-8で紹介したものと同様のもの。ペットボトルや、ガラス瓶の中に今回は、桜島の火山灰をごく少量入れて、容器を振ることで、容器内に火山灰が舞うようにする。そして、そこへレーザー光線を当てると、光線の道筋が見えるようになる。賢治の「告别」という詩に光のパイプオルガンという表現が出てくるが、その詩の場面と合わせてこの現象の仕組みを紹介した。

###### 4-1-③. 銅の酸化還元

直径約1mmの銅線をアルコールランプで加熱し、赤熱するまで加熱させる。少し冷めてくると酸化されて赤色の銅線が黒ずんでくるのを確認する。この後、エタノールの30~50%溶液に浸すと、銅線が還元され、どうのものと色「赤銅色」が観察できる。

この様子は、賢治の作品、春と修羅第2集「一三三

(つめたいうみの水銀が)」に記されており、その現象を紹介した。



写真13. プチサイエンスショーのようす

写真手前では、銀樹の実験、奥では、銅の酸化還元の実験を行っている。それぞれ1回3～5分程度の実験で、訪れる見学者に実験と解説を行った。



写真14. チンダル現象

こちらのプチサイエンスショーでは、ガラス瓶の中に桜島の火山灰を入れ振りまぜた後、レーザー光線を当てその光跡を確認した。

#### 4-2. 宮沢賢治に関する講演会2件

本企画展実施中に、講演会を2回開催し、宮沢賢治や化学、本企画展への理解を深める機会を設けた。以下にその概要を記す。

##### 4-2-①. 「祖父から聞いた宮沢賢治」

- ・開催日時:10月23日(日)14:00~16:00
- ・講師:宮沢和樹氏(林風舎代表)
- ・参加者:57名
- ・内容:宮沢和樹さんに、祖父宮沢清六から聞いた8歳年上の「兄 宮沢賢治」について語っていただいた。賢治が通った「イギリス

海岸」の地質、作品「檜ノ木大学士の野宿」、「銀河鉄道の夜」など祖父が教えてくれた科学と賢治さんについて紹介いただいた。

##### 4-2-②. 「宮沢賢治と化学、元素」

- ・開催日時:11月27日(日)14:00~16:00
- ・講師:桜井 弘氏(京都薬科大学名誉教授)
- ・参加者:66名
- ・内容:宮沢賢治は、鉱物愛好家、地質研究者、詩人、童話作家、教師そして農民として生き、多くの作品を残した。その賢治の作品は、すべて自然や人びととの触れ合いから生まれたものばかりで、これらの作品に触れるとき、元素や化学の世界がいたるところに現れることに気づき、ふしぎな世界に入って行くのを感じる。その賢治が自然や心を表すために、元素や化学をどのように用いたかを紹介していただいた。

#### 4-3. ギャラリートーク

企画展の会期中、筆者が本企画展の内容を解説するギャラリートークを行った。1回約20分で行い、企画展の内容理解を深めていただいた。主に大人の方の参加が中心だった。手狭な会場内に多くの方に集まっていたが、その分、聴講者との距離が近く、話し声も通りやすく、やり取りがしやすいことで熱心に聞いていただく方へのサービスとすることができた。



写真15. ギャラリートークのようす

開催日と参加者数は以下の通り。

- |               |     |
|---------------|-----|
| ①12月3日(土)     | 30名 |
| ②12月24日(土)    | 40名 |
| ③2017年1月8日(日) | 50名 |
| ④1月14日(土)     | 60名 |
| ⑤1月15日(日)     | 50名 |

#### 4-4. 大人向け化学実験教室

毎年筆者が行っている大人向けの化学実験教室「大人の化学クラブ」を今回は、本企画展に連動させ、企画展と同じ「化学と宮沢賢治」とテーマで実験を行った。これは、連続2回の教室で、化学実験を通して、化学の内容を理解していただいたり、深めてもらうものである。

・開催日時：①11月23日(水・祝)

②12月23日(金・祝)

いずれも14:00～16:00

・参加者：20名（18歳以上）

・参加費：2,000円(2回分)

・内容：①銀を取り上げ、顕微鏡下で銀の結晶成長を観察した。また銀を時計皿の凹面に析出させることにより、凸面鏡を作る実験を行った。

②賢治が作品の中にエステルや、カルボン酸などを散りばめていたことから、関連する内容としてエステル合成を取り上げ、酢酸イソアミルを合成したり、香り袋を製作した。

これら実験を通し、賢治が作品中に用いた化学用語の実際を知ってもらい、賢治が謎その言葉を作品に用いたのかを考え、想像するための材料の一つとしてもらった。

#### 4-5. ミニブック「化学と宮沢賢治」の制作

本企画展に合わせ、宮沢賢治と化学の関連を紹介するための当館ミニブックシリーズ「化学と宮沢賢治」を制作した。今回の執筆は、筆者と、京都薬科大学名誉教授の桜井弘氏に協力いただき、連名での執筆と



写真16. ミニブック「化学と宮沢賢治」  
A5版 24ページ、オールカラー。

した。

全24ページで化学と宮沢賢治の関わりを「化学本論」「元素と化学」「教材絵図」など7つのテーマで取り上げ、紹介した。

宮沢賢治の研究では、やはり文学面、人間面での研究事例が多く、科学面はそちらに比して数が少ない。しかし、齋藤文一氏、力丸光雄氏、宮城一男氏など理学系、医学系の先生方により優れた解説が行われている。本誌は、そこにわずかながらでも協力できるようにし、宮沢賢治の化学との関わりについて詳しく言及したもので、一般読者が手に取って、少しでも賢治理解に役立てるようにした。

なお、本冊子は、当館ミュージアムショップにおいて、1冊100円で販売した。

#### 4-6. 展示資料目録兼文庫本ブックカバーの制作

今回の企画展では、展示資料の一覧を制作し、どの展示に何が置いてあるのかを来場者がわかるようにした。これまでの企画展でも展示資料一覧を作ってきたが、会場を離れてしまうと、展示を見た記念にはなるが、あまり意味を持たないものになってしまい、持ち帰っても捨てられても仕方ないものでもあった。

そこで、今回は、資料一覧の裏側に宮沢賢治が、帽子をかぶってうつむきながら立っている有名な写真を背景にすることで、文庫本のブックカバーにすることができる形(153×270mm)に成型し作成した。このような形で制作することで、持ち帰った資料一覧が何らかの文庫本、願わくば、宮沢賢治の文庫本のカバーとして利用してもらい、科学館で開催された企画展であることを末永く記憶してもらえるように、また来場者の手元に残しておいてもらえるように工夫した。



写真17. 資料目録兼ブックカバー

文庫本がちょうどカバーできるサイズで制作し、この反対側の面に今回の企画展で展示した資料の一覧を掲載した。モノクロ印刷。

#### 4-7. 全天周映像「銀河鉄道の夜」の上映

本企画展は10月15日から開催したが、その前の8月30日より、関連プラネタリウムとして「銀河鉄道の夜」を上映した(上映終了は、11月27日)。こちらの映像

は、KAGAYA スタジオ制作のフル CG 映像であり、当館のプラネタリウムに組み込み上映した。

#### 4-8. 販売品関係

本企画展開催中、当館ミュージアムショップでは、今回制作したミニブック「化学と宮沢賢治」の他、宮沢賢治の文庫本、クリアファイル、複製版「雨ニモマケズ」手帳などを販売し、来場者がお土産として持ち帰ることができるものも用意した。

さらに当館の喫茶店「シルバー」に協力を仰ぎ、オリジナルデザート「賢治ショコラ(チョコレートケーキ)」を作ってください、販売してもらった。このショコラのデザインは、単なるデザインではなく、それぞれに意味を持たせるようにして作った。

賢治のイメージシルエットの足元に置いた金粉は、賢治が農業で奮闘したことから、秋のお米の実りを表すものとして配置し、上部には、銀河鉄道などでも出てくる、北十字(白鳥座)をあしらった。そして、ケーキ脇に置いていたアイスクリームは「永訣の朝」に記された真っ白な二相系「液体-固体」の想起させるようなものとしてあしらった。



写真18. 賢治ショコラ

フォンダンショコラのベースに賢治のイメージポーズ、金粉、北十字、アイスクリームを置いて仕上げた。単品で500円、ドリンクとのセットで700円。1日限定10食で販売したが、一般来館者の多い土日は、売り切れになることも多かった。

#### 5. 企画展の総括

本企画展を実施するにあたり、約2年の時間を要した。短歌を除く賢治の全詩約917、物語147を読み、その中から化学用語を抜き出す作業から始まり、資料収集などを行った。実際その用語がどうしてその作品の中に現れたのか、用いられたのかについては、今回は解説や説明をすることができなかったが、少なくとも

今まで文学作品として扱われていた賢治作品の化学用語に注目することで、その部分を読み飛ばしていた人々への有効なヒントとすることはできた。また、逆に化学を知っている者にとっては、賢治がこれほど化学用語を作品中に取りこんでいたのか、またどれほど深く化学に携わっていたのかを知る機会とすることができた。

特に今回は150点近い実物の資料を展示することができたので、来場者が自身の目で資料を確認することができ、その資料からどのようなインスピレーションを賢治得たのかなどを知ることができる。このように資料から来場者とその対象に対し、想像を高めるまた深めること、理解を促すことは、博物館施設としても重要な役目である。

文学者として位置づけられる宮沢賢治であるため、文学館などではよく企画展が開催されている。理工系の博物館ではこれまで、群馬県立自然史博物館で「宮沢賢治と自然」(1997年10-12月開催(国立科学博物館が「石の世界と宮沢賢治」(2014. 4-6月開催)、また岩手県の石と賢治のミュージアムでは、鉱物類を中心とした展示などを行っているが、本企画展のように化学を中心に据えた展示会は、これまでなかった。

これは扱う物質がやはり一般的でないことと、化学を学んだ賢治という視点での展示機会がなかったためと考えられる。

非常に多面的な層を持つ宮沢賢治のほんの一面だが、盛岡高等農林で化学を学ぶことでその後の作品にも化学用語を散りばめるだけでなく、賢治の弟清六氏が、「兄の机の上には、いつも化学本論上下と法華経が載っていて、どれほどこの本を大切にしたか知らなかった。」(「兄のトランク」宮澤清六著 ちくま書房)と書かせるほど、深く化学に関わっていた賢治の一面を知ってもらう機会を作ることができた。

おかげさまで好評のうちに終了した本企画展だが、化学という面から、より賢治を掘り下げることで、賢治の作品理解や、化学への興味関心を来館者に喚起できるように今後は、当館の常設展示場での展示化を図りたい。そのための資料は、ある程度収集することができたが、より調査を深め、早めに常設展示化することを筆者の次の目標としたい。

#### 6. 謝辞

本企画展を実施するにあたり、資料並びに情報の提供等、数多くの個人・団体の皆様にご協力を頂いた。

以下に掲載し、感謝を申し上げます。



企画展「化学と宮沢賢治」協力者

- 石と賢治のミュージアム  
 一般社団法人花巻観光協会  
 岩手県立図書館 岩手大学 長 隆義  
 株式会社 筑摩書房 株式会社 林風舎  
 関東天然瓦斯開発株式会社 久慈琥珀博物館  
 群馬県立自然史博物館  
 公益財団法人 益富地学会館  
 株式会社高純度化学研究所  
 桜井 弘 滋賀県甲賀市・今郷好日会  
 信州大学 大仙市協和公民館  
 大日精化工業株式会社 田川 正俊  
 たばこと塩の博物館 東北大学  
 豊橋市自然史博物館 灘中学校・灘高等学校  
 花巻市 「早池峰と賢治」の展示館  
 福野 憲二 北海道立文学館  
 南比都佐公民館 宮沢 和樹  
 宮沢賢治学会イーハトーブセンター  
 宮沢賢治記念館 宮沢賢治研究会  
 有限会社 古川理工 吉井 隆  
 理化学研究所

以上全ての皆様に本紙面を借りて改めて厚くお礼を申し上げます。

また当館の様々な部署のスタッフにも、本企画展を実施するにあたり、多大なるご協力を頂いたことについても、お礼申し上げます。



写真19. 企画展チラシ

